

平館村今津で使われていた漁網の石製沈子 (略報) — 縄文時代の石錘と酷似した民俗資料 —

岡本 洋*

A Brief Report of Stone Sinkers for Fishing Nets Used in Imazu, Tairadate, Aomori: Folklore Materials Closely Resembling Jomon Period Stone Weights

OKAMOTO Yo

キーワード: 沈子、石錘、漁網錘、縄文時代、打欠石錘、切目石錘、平館村今津、平内町浦田、脇野沢村

1. はじめに

考古学では自然石を利用した石錘とよばれるおもりのうち、石の縁辺に紐かけの袂りをつけた分銅形の打欠石錘(図1)について、編み物(もじり編み)用であるか漁網用の錘具であるかという論争が長く続いてきた(渡辺1973、山本2011など)。この論争が決着しなかった理由は、打欠石錘に類似した沈子(漁具の錘)を利用した漁網を民俗例で示せなかったということに尽きる。

青森県では、葛西励氏が李平Ⅱ号遺跡の報告書で、37点出土した打欠石錘について一般に漁具とした上で、「昭和53年に下北郡脇野沢村で昭和37年ごろまで鱈漁に使用されていた石錘を拝見した事があるが、本遺跡で出土したものと全く同形のものであった」(葛西・高橋1980)という重要な指摘を行ったが、鱈漁に使われた石錘の写真や図は示されなかったためにこの論争に加わることはなかった。

同じころ、当館民俗分野による調査では、夏泊半島西岸に位置する青森県東津軽郡平内町の浦田集落において「オモりの材料は浜の平たい石の両端を欠き、麻糸で網に固定した。その後ヤゲイシという陶製のオモリに変わった」という知見が得られている(成田1981)。同報告には図や写真は掲載されておらず、重量や網自体の大きさ、対象魚種についての言及は無い。しかし、まさに打欠石錘が実際の網漁で沈子として使われていたことを示す貴重な民俗誌である。ただ、当館の考古分野と民俗分野で問題が共有されなかったために、この方面からも縄文時代の打欠石錘の用途に迫ることはできなかった。このほか、当館には撮影場所や年代は不明ながら図2のような石錘の写真が残されており、筆者は青森県の民俗例を石錘研究の深化につなげることができるのではないかと考えてきた¹⁾。そうした中、当館民俗分野の学芸員の協力により、図2とは別に、袂りのある沈子がつけられたままの漁網(図5~8)が当館収蔵資料にあることが分かったので、速報的に紹介したい。

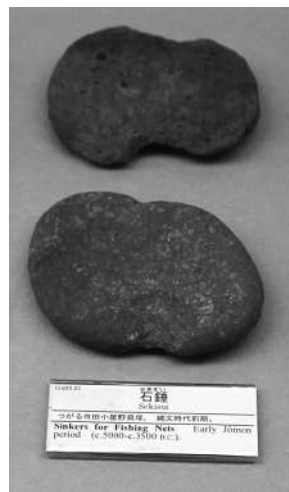


図1 縄文時代の打欠石錘



図2 漁網の石製沈子

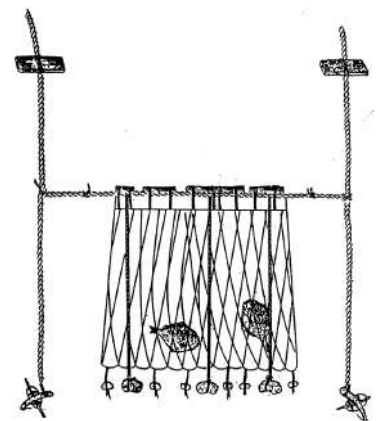


図3 『青森県漁具誌』にみえる沈子

2. 資料の概要

図4は沈子がつけられた網の資料カードである。青森県東津軽郡平館村(現外ヶ浜町)今津で使われていた刺し網で、昭和53年9月14日に寄贈されたことが記されている。網はナイロンなどの合成繊維ではなく植物繊維の糸から作られたもので、カードにはシナノキ皮製と書かれている。図5のように保管されており、アシと呼ばれる沈子、アバと呼ばれる木製の浮子もついており、ほぼ使用時の状態(使用後の収納状態というべきか)をとどめた良好な資料である。なお、網にくるまれるようにして昭和27年8月27日付の新聞に包まれたイカ釣りの疑似餌2本と一緒に保管されており、この網の使用年代を示す可能性がある。網は差し渡し20m、高さ5mを超えるため、完全に広げて計測・写真撮影することはできなかった(図6)。網の目は一辺2cm(対角線で2.5cm)程度と狭く、小魚を捕るためのもの

* 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

のと思われるが、現段階では対象魚種は不明である。沈子は網の下端に通された直径約7mmの縄にワラのような素材の縄で結び付けられている(図7・8)。60～80cmほどの間隔で33点を取り付けられていたようだが、3か所で外れた痕跡があり、現在は30点が残っている。30点はすべて縄で結ばれた状態のため個別の計測ができない。沈子に使われているのは長径7cm、短径5cm、厚さ1cm、重さ70gほどの扁平な石である。縄を取り付けるための深さ数ミリの抉りが設けられているため、形状は縄文時代の打欠石錘によく似た分銅形である。抉りの作出方法は詳しく調査できていないため現時点では断定できない

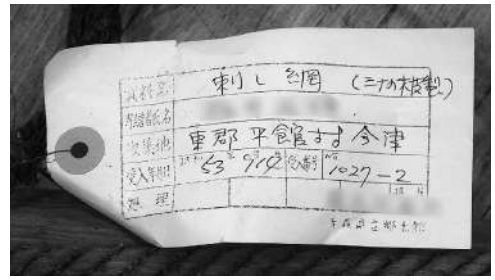


図4 網の資料カード

が、金属製の道具で溝を切るように組かけの部分を作っている可能性があり、考古学的には切目石錘の一種とすべきかもしれない。木製の浮子は50cmほどの間隔で20点を取り付けられている。先述の浦田集落の調査では木製浮子には桐材とウルシ材があり、刺し網にはウルシ材が用いられたという報告であったが、本例の浮子の材質については現状では未調査である。青森県における石製の沈子については様々な民俗誌があるものの、縄文時代の打欠石錘に形状が類似したものの記録は極めて乏しい。ただ、本例のほか蓬田村文化伝承館所蔵の刺し網²⁾や、文字情報のみとはいえ先述の平内町浦田と脇野沢村(現むつ市)の事例から、同形の沈子は陸奥湾内各所で使われていた可能性がある。

3. 今後の展望

渡辺誠氏は自らの民俗調査における知見として「(石錘からの)紐の脱落を防ぐために、少し打ち欠いたらどうかという質問に対して、そういうことをすると波にもまれて紐が切れてしまう。必ず自然石のまま使わなければならない」という答えであった。このことによって、粗い打ち欠きしか施されていない礫石錘³⁾は、漁網錘ではないとの一層の確信を得た(渡辺2002)としているが、本稿で示した沈子は、縄文時代の打欠石錘が漁網錘としても使用可能であることを示しているのではないだろうか⁴⁾。

本稿で紹介した漁網についての本格的な調査は、民俗分野の支援を得たうえで来年度以降に行うことを予定している。さしあたり、次のような課題の解決が求められよう。

1. 沈子に設けられたの抉りの作出方法の調査
2. 網・沈子・浮子の図化、計測、写真撮影
3. 沈子に用いられた石の石質鑑定、網や浮子の素材に関する樹種同定など自然科学的調査
4. 青森県における石製の沈子を用いた漁網の民俗調査(本例の使用時の状況に関する聞き取りを含む)

調査の進展によっては新たな課題も浮かび上がるかもしれないが、これまで紹介されていない、また今では忘れ去られようとしている県内の石製沈子を調査することにより、縄文時代の打欠石錘の用途を解明する一助としたい。

註

- 1) 抉りの作出は不明ながら、『青森県漁具誌』(鯉底刺網; 図3)にはくびれのある石が沈子に使われた様子も図示されている。
- 2) 『青森県史』掲載の刺し網のおもり(青森県史編さん民俗部会2014 I-2-34)は、本例と同類と考えられる(筆者未見)。
- 3) 渡辺誠氏は打欠石錘ではなく礫石錘と呼称している。
- 4) 筆者は、打欠石錘に類似した形状の漁網錘が現代において使用されていた事例を紹介することによって、縄文時代の打欠石錘が漁網錘として使用可能であるという見方を補強したのであって、本稿で示した沈子が縄文時代の漁網錘の系譜にあると主張するものではない。本例は山本直人氏(2011)が民俗例から示した「8～110gの打欠石錘は漁網錘になる可能性がある」という検討結果の妥当性を示す一方、打欠石錘の多くがその重量範囲を上回るという問題については解決できない。

文献

- 青森県水産試験場 1915 『青森県漁具誌』
 渡辺誠 1973 『縄文時代の漁業』考古学選書7 雄山閣
 葛西励・高橋潤 1980 『李平II号遺跡発掘調査報告書』調査報告第2集・考古-2 尾上町教育委員会
 成田敏 1981 「IV-4 漁業」『浦田の民俗調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第10集・民俗-5 青森県立郷土館
 渡辺誠 1981 「編み物用錘具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集』史学27
 渡辺誠 2002 「考古学のための民具2・漁具」『名古屋大学博物館報告』No.18
 山本直人 2011 「縄文時代の打欠石錘の用途に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』史学57
 青森県史編さん民俗部会 2014 『青森県史』民俗編・資料・津軽 青森県



図5 網の保管状況



図6 広げた状態の網



図7 網につけられた沈子



図8 沈子の取り付け方